ヲカムリ出テ、一番鎗ヲ合セ、手柄ヲシタリ、信長大ニ賞美サレタリ、是ヨリ人皆異名シテ、編笠七兵衛ト云、後年秀吉公ニ仕ヘ、度々軍功有テ、旗奉行トナル、

〔東海道名所記六〕まづこの馬場にさしかゝりて、小袖の衣裏裙の亂れをつくろひ、〇略中あみ笠引こみて門に立入る、又は鍛冶ややのやしなひにて、摺箔やの年功の弟子など、そめ物屋の生子殿をそゝのかし、〇略中あみがさのしたに、はながみをはさみてふくめんとし、去どろなるはな歌をうたひて、のさばり行く、

〔嬉遊笑覽二中器用〕編笠の下に紙のふくめんしたる古畫あり、是等は手輕きを風流とせしなるべし、〇略中誰身の上三深きあみ笠引かぶり、はな紙折て顏にあて、日々にあげやとやらむへかよふ云々、

〔好色一代男五〕欲の世中に是は又

室は西國第一の湊、〇略中此所は十三日限に萬世のやかましき事をも互にすまして、盆の有樣を見せて、男は小さき編笠を被き、女は投頭巾に大小をさすもありて、女郎まじりの大踊、〇略下

〔好色二代男七〕庵さがせば思ひ草

法師の紋附の羽織、大編笠の被振、目に立つ風情ありて見るに、〇略下

〔俗つれ〴〵二〕只取るものは澤桔梗、銀で取るものは傾城、

渡世の種もなければ、深編笠に大脇指、日頃拔上げたる額口、今似せ牢人の爲となり、〇略下

〔見た京物語〕雪踏直しは、編笠を著て、ぬりたる箱を荷ぎ、なをし〳〵とよびありく、形も小ぎれゐなり、乞丐人とは見へず、

〔嬉遊笑覽二中器用〕あみ笠、人めを忍ぶによければ、いつの程はりか、遊所にかよふ者に、其あたりの茶屋にて是を借す、其家々の目印に燒印を押す、これを燒印の編笠といふ、〇略中後日男二ほそをの